

## 第Ⅳ章 研 究 編

### 1. 東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題

佐久間光平・本田泰貴

#### (1) はじめに

近年、日本各地に於て近世遺跡の発掘調査が行われ、その数も年々増加している。とりわけ、東京（江戸）、大阪などの大消費地を中心とした城下町・城郭の調査・研究は、文献史料では捉えきれない数多くの新事実を明らかにしている。この東北地方においてもまた同様である。

こうした近世遺跡の調査に伴い、出土する陶磁器類の数もおびただしい。これらの陶磁器類は、遺跡・遺構の年代・その変遷、あるいは性格を考える上で、重要な示標となることは言うまでもない。しかし現状をみると、考古学的調査による陶磁器の生産地（窯）資料の蓄積、研究が立ち遅れているために、消費地遺跡出土資料の年代的位置付け、生産地同定などは不明確な場合が多い。確かに、伝世品、表採資料、窯跡の数少ない発掘資料からある程度、消費地遺跡出土資料の年代・産地など推測のつく場合もあるが、それはごく限られた数でしかなく、江戸後期ともなれば、東北地方でも各地に相互の技術的交流を持った窯が築かれ類似した製品を造りだしているため、大まかな年代ならいざ知らず、生産地窯を特定するとなるとかなり困難である。

東北地方において、陶磁器をめぐる考古学的研究が始まったのはごく最近であり、年々近世遺跡出土資料の増加とともに数多くの問題を抱え始めている。今後の東北地方の近世遺跡研究の進展のために、ここでは東北地方の近世窯業と仙台圏内を中心とした消費地遺跡出土陶磁器の現状・問題点を整理するとともに、東北の近世陶磁器研究をめぐる、今後どのような調査・研究が必要かなど、その課題についていくつか検討を加えたいと思う。

#### (2) 窯業史

東北地方の陶器生産は、西日本にそれほど遅れることなく16世紀末から17世紀には始まった（図67）。文献では、天正13（1585）年に始められた秋田県の上城目焼が、現在のところ東北最古の近世窯として考えられている。しかし、現在に伝世する叩き目のある焼締め陶器は18世紀から19世紀のものと推定されており、開窯当初のものがどのようなものであったかは確認できていない。山形県米沢市にある戸長里窯跡は、地元まんぎり会によって調査され、その開窯年代は16世紀末から17世紀初めと考えられている。福島県では、元和8（1622）年に名古屋焼（寛永20：1643年の二本松万古焼の前身とされるもの）、天正2（1645）年に丈六焼が始まったとさ

れる。飯坂の岸窯跡からは正保年銘（1644-1648）の陶片が出土している。会津本郷焼きは正保4年（1647）に始まるが、その創始者の水野源左衛門はそれ以前に長沼で製陶を行っていたとされる。相馬駒焼は慶安元（1648）年に始まったとされ、その技術を持ち帰った左馬が元禄年間（1688-1704）に大堀相馬焼を始めている。青森県では平清水三右衛門が元禄4（1691）年に開窯しており、元禄年間には宮城県の堤窯・末家窯も始まったとされる。

18世紀後半から19世紀初めになると東北各地に窯が開窯する。この時期の窯の主なものには文化3（1806）年ごろ始まったとされる青森県の悪戸窯、宝永年間（1704-11）とされる岩手県の寺町窯、相馬田代窯の技術を修得して化政年間（1804-30）に始めたといわれる小久慈窯、仙台の職人によって享和元（1801）年に始まったといわれる鍛冶町窯、文化年間（1804-18）に堤の職人によって始められたという赤萩窯、秋田県では明和8（1771）年に大堀相馬の職人によって始められた白岩窯、天明7（1787）年これから分派した寺内窯、寛政4（1792）年相馬の職人を呼び始まったといわれる明王院窯、宮城県では化政年間（1804-30）には始まっていたと思われる山ノ神窯、明和年間（1764-72）以前には開窯していたと思われる上の目窯、宝永5（1708）年の文書にでてくる白石窯などがある。塩内窯も18世紀まで遡る可能性を残す。山形県では文化年間に常陸、文政年間に相馬の職人が来訪して起こした平清水窯、安永元（1792）年、銘の製品が伝世する大宝寺窯、安永7（1778）年相馬の技術によって始まったとされる成島窯がある。福島県では寛政8（1796）年に始まる後藤窯がある。

19世紀後半には東北各地でさらに多くの陶器窯が築かれる。これらの窯は近くの中核窯の技術をそのまま受け継ぎ、規模が小さくまた流通範囲も非常にせまい、地域の需要に密着しているものが多い。そのため基盤力も弱く、幕藩体制の崩壊時に廃窯となったものが多い。

東北地方における磁器生産が始まったのは、現在のところそのほとんどが19世紀に入ってからと考えられている。青森県悪戸窯では安政5（1858）年に肥前陶工によって始まっており、岩手県では天保7年（1836）に肥前唐津陶工による山陰窯、秋田県では安政前後ごろに白岩窯、安政2（1855）年には寺内窯が始まる。宮城県ではその創始年は確定できないが化政、天保期には切込窯・三本木窯・宮床窯・白石窯で磁器生産が始まったと考えられている。山形県では天保4（1833）年に上ノ畑窯、弘化元（1844）年に天草陶工の指導で平清水窯が始まっている。福島県の会津本郷窯では寛政12（1800）年に肥前で技術を修得して始まったとされる。

こうした東北地方の窯の成立時期を大きく4期に分けてみた（図68：Ⅳ期は図示せず）。Ⅰ期は16世紀末から17世紀にかけてであり、この時期は西日本からの技術を直接導入し開窯する期間といえる。文献でみる限りその技術は大堀相馬焼を除いて京・尾張・江戸地方から導入している。県別にみると福島県に集中しており、東北地方への陶磁生産技術の導入は、関東に近いこの地から始まったことがわかる。これらの多くは藩との関係が強い限定的な小規模窯であっ

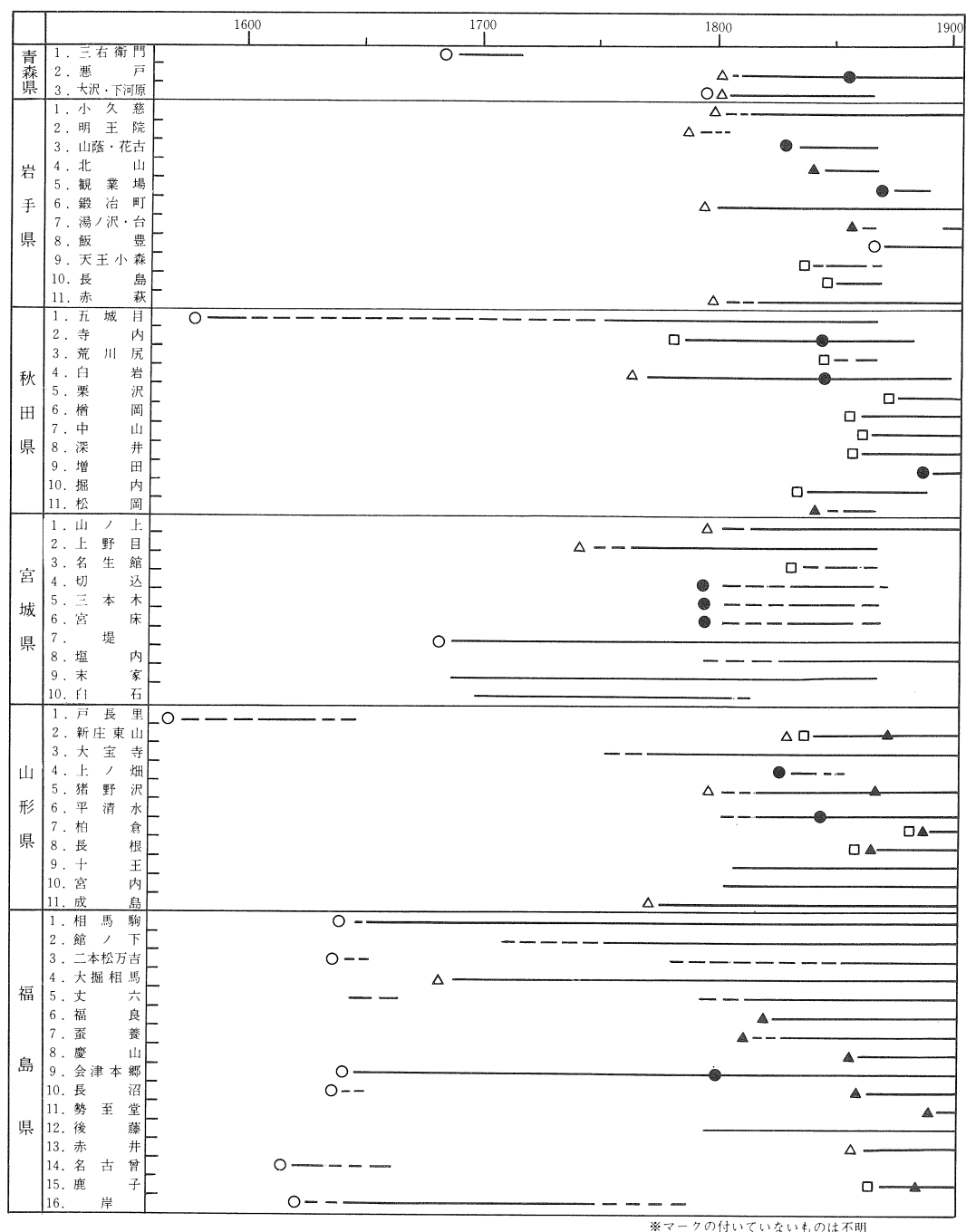


図67 文献による東北諸窯の発生時期と開窯期における技術導入

Fig. 67 Initiation of modern ceramic kilns in the Tohoku district and origin of their technic, known from literatures.

たようだが、18世紀になると大量生産民窯として大きく発展したものもある。

Ⅱ期は18世紀後半から19世紀初め（明和～文化年代頃）である。この時期、東北地方一円で新たに窯が開窯する。この時期の窯は、開窯時の技術を西日本の諸窯ではなく東北圏内の大堀相馬窯や堤窯のように17世紀に開窯・発展し、18世紀には大きな窯業地としてすでに成立していた窯との技術交流によって成立したものが多い。特に大堀相馬の技術の移動は著しく、山形、秋田県地方の諸窯の開設に大きく関わっている。これに対し堤窯は、宮城・岩手方面にその技術を提供している。これらは、それぞれがその存在する経済圏内（平野や盆地と河川の組合せ）を中心とした中域的な供給圏をもち発展するが、その後導入地と異なる独特の形式を確立していったものも多く、これは初期技術以後その土地の陶土などの生産条件や需要状況に合わせて新たな技術を入れるなどして変化していったためと思われる。このような変化は特にある程度流通圏のある民間窯にみられるが、その技術は陶工の移動などで随時行われていたと考えられる。

Ⅲ期は19世紀後半、文政・天保頃～幕末前後である。この時期の窯は、Ⅱ期に発生した窯の分窯的性格が強く、Ⅱ期の窯が他地域の技術から始まりながら新たに技術を取り入れてその土地に即した製品をつくり出していったのに対して、これらのほぼ完成された様式をそのまま受け継いで生産を行うものが多い。これらは製品供給範囲が狭く、在地との関係が密接であり、その製作器種も主に日常生活用で多種にわたる。またこれらの発生は、Ⅱ期が東北圏内均一に発生しているのに対し、岩手・秋田県地方に集中する傾向がある。これらは、大堀窯など流通陶磁器が入りにくかったことと関係があるのかも知れない。これらの窯はその多くが幕藩体制の終わりと共に廃窯する。

Ⅳ期は、明治に入ってからのものであり、発生件数は多いがそのいずれもが短命に終わっている。またこれらは、磁器生産と関わっているものが多いことも特徴である。

磁器生産窯はⅢ期に分けてみたが、その区分は陶器窯とややずれる。磁器Ⅰ期は、19世紀前期、化政期～天保までである。地域によって若干ずれがあるが、この時期に東北磁器窯はその技術を肥前から得て生産を開始するものも多く、初期では肥前製品と同様式のものが多い。また、肥前からの技術導入としては、太平洋側と日本海側で差異がみられる。こうした磁器窯の発生は陶器窯のⅡ期にやや遅れて始まり、18世紀後半から始まっていた陶器窯の発生と密接な関係がある。

磁器Ⅱ期は幕末までである。これらは陶器窯のⅡ期と似て、中核窯の分窯的な存在と捉えることができる。蚕養窯や福良窯のような分窯的な窯の開窯や、Ⅰ期成立窯でも、平清水窯と切込窯にみられるような技術の交流が行われ、肥前様式からはなれて地方色のでた日常雑器を作り出すようになる。しかしこうした磁器窯の多くは肥前や瀬戸製品に比べコストが掛かり、品

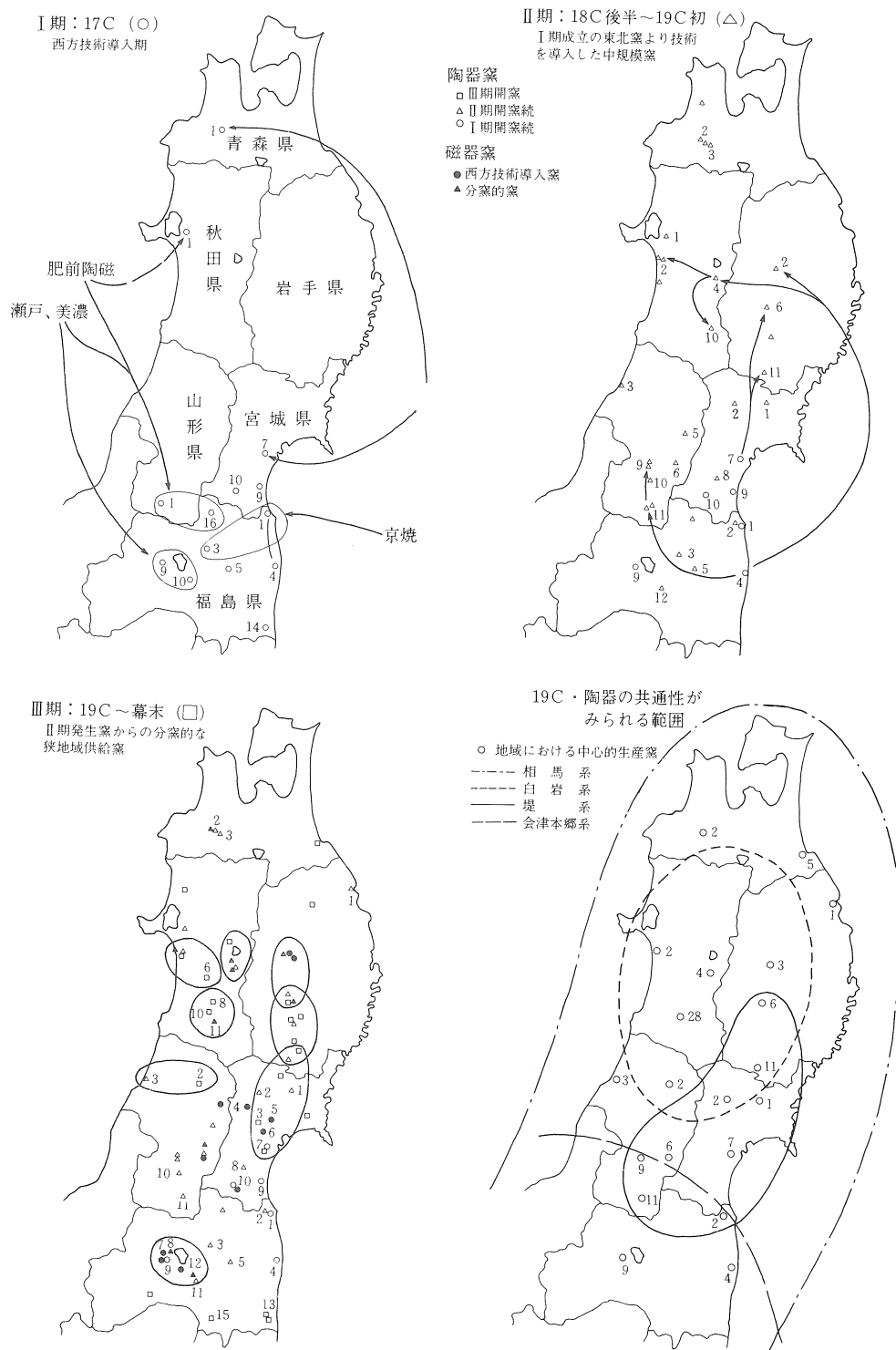


図68 東北諸窯の技術伝播・交流図

Fig. 68 Technical propagations and exchanges among(modern Tohoku kilns

質も劣ることが多かったために、幕藩体制の崩壊時や鉄道開設の時期に廃窯となる。

Ⅲ期は明治に入って開窯された窯で、これらは肥前や東北磁器生産窯からだけではなく、瀬戸からその技術を導入するものがみられる。その多くは短命に終わるが、Ⅰ期から続く会津本郷や平清水窯などは製品の転換などで生き延びていく。

東北地方の各生産窯の販路・供給圏をみた場合、東北の諸窯には、全国的なものではなく1～数カ国のものにとぐく限られた狭小地域のものにかぎられ、ほとんどは後者のタイプである(伊藤 1990)。前者のタイプのうち例外的な広さの流通範囲を持つ窯業地として大堀諸窯がある。この諸窯はその製品レベルが高く、輸送に都合のよい碗皿、土瓶類などを北海道から江戸にまで大量に輸出している。この大堀諸窯には及ばないが、比較的に広い範囲に流通圏を持つ中規模窯があり、これらには青森県の悪戸窯、岩手県の鍛冶町窯・赤萩窯、秋田県の白岩窯・寺内窯、宮城県の堤窯、山形県の平清水窯・成島窯、福島県の会津本郷窯などがある。これらはその存在する平野や盆地を中心に供給し、また船運などによって近隣の大消費地に供給を行っている。このほとんどはⅡ期の成立窯であり、18世紀から19世紀にかけてその体制・流通を確立したものと思われる。また、大堀窯や会津本郷窯など福島県の窯の一部は、新潟・山形などの日本海側にその流通圏を求めており、東北地域においてだけの範囲ではなく関東あるいは北海道も含めて流通圏を考える必要がある。製品の販路、生産技術を考えると、特に江戸は重要となる。江戸に多くの供給量を持った大堀窯では、その技術を江戸の嗜好に合わせるべく取り入れたであろうし、そうして得た技術は大堀相馬窯でワンクッションが置かれ、東北各地へ伝播したことも充分考えられる。

19世紀後半になると多くの窯が成立してくるが、これらはⅡ期に成立した中規模生産窯の分窯といってよく、その規模は小さく流通範囲も狭いものが多い。

### (3) 近世陶磁器窯調査事例

16世紀末から17世紀における生産地遺跡で発掘調査が行われているものに山形県の戸長里窯(まんぎり会 1986)と福島県の岸窯跡がある(図69)。戸長里窯の技術には唐津系と瀬戸系の技術がそれぞれにみられ、製品には茶陶類、碗皿、壺瓶類、甕、播鉢などがある(図70)。岸窯の調査では正保年記銘のある陶片が出土しており、17世紀半ばには開窯されていたと思われる。製品には茶陶類や播鉢など多種多様のものがあり、量産体制で稼働していたと思われる(伊藤 1990)。仙台城からもその製品と思われるものが出土しており、その流通圏はかなり広域にわたっていたと考えられる。18世紀後半から19世紀にかけての陶器窯では5例が報告されている。福島県大熊町山神窯、浪江町中平遺跡・長井屋窯跡・三春町担橋窯跡・棚倉町八幡沢窯跡などである。

山神窯跡(大竹 1982)は、18世紀～19世紀前半をその操業年代として推定しているもので、

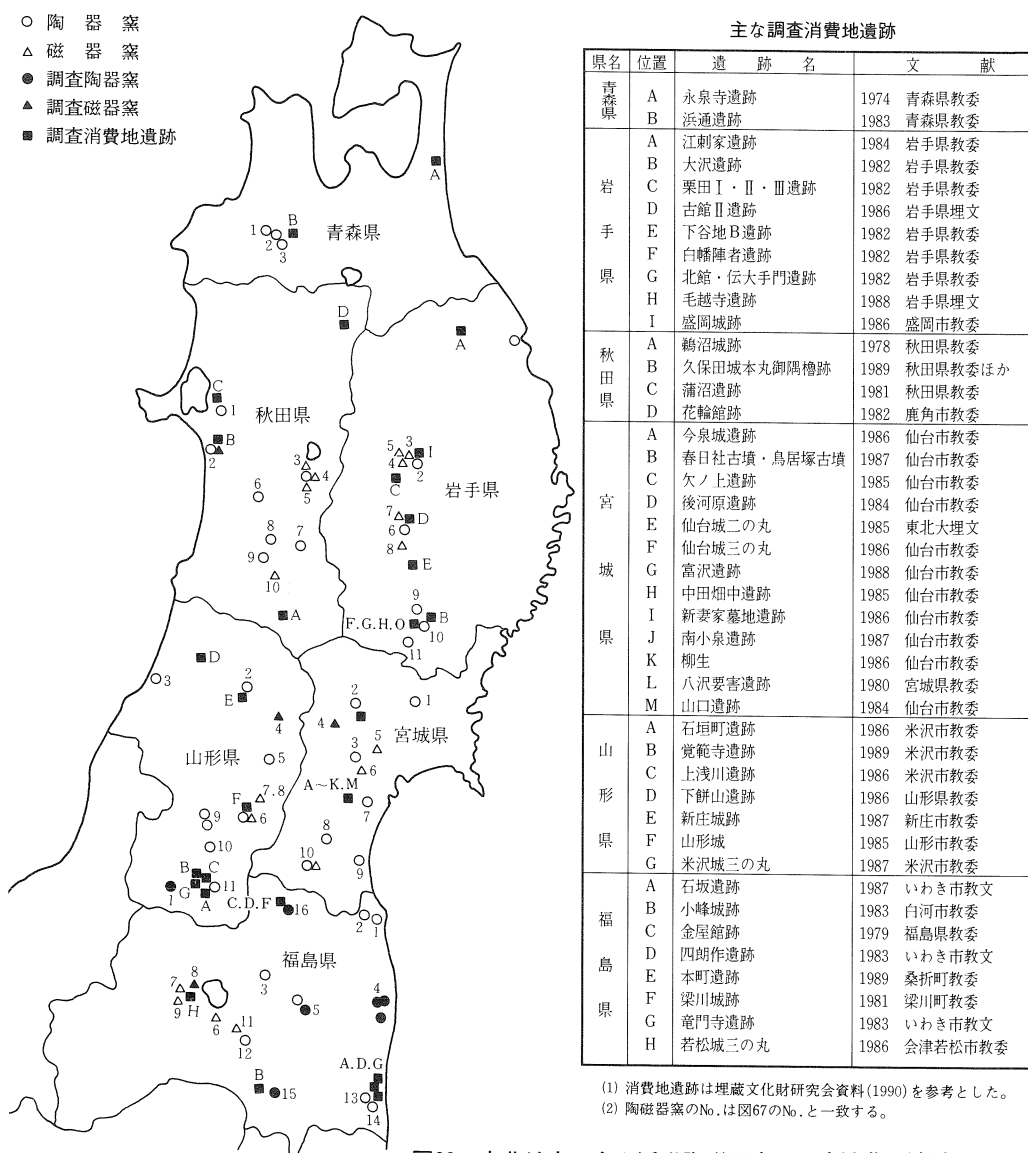


図69 東北地方の主な近世陶磁器窯と調査消費地遺跡  
 Fig. 69 Representative modern ceramic kilns in the Tohoku district and their consumer sites

茶碗を主体に1,000点を越える遺物が出土している。腰部が折れる茶碗と碗形で口縁部から胴部中央部にかけて割菊花文を施したものなどがある。長井屋窯（大竹 1989）は、福島県浪江町大堀にあり、当時の大堀相馬諸窯の中心地域である。出土遺物は2万点以上あり、その器種も多種多様である。層位は窯部7層、物原部5層に分けられ、18世紀後半～大正期までの年代が考えられている。中平遺跡では灰原が検出され、江戸時代末期から明治初期の製品が大量に出土

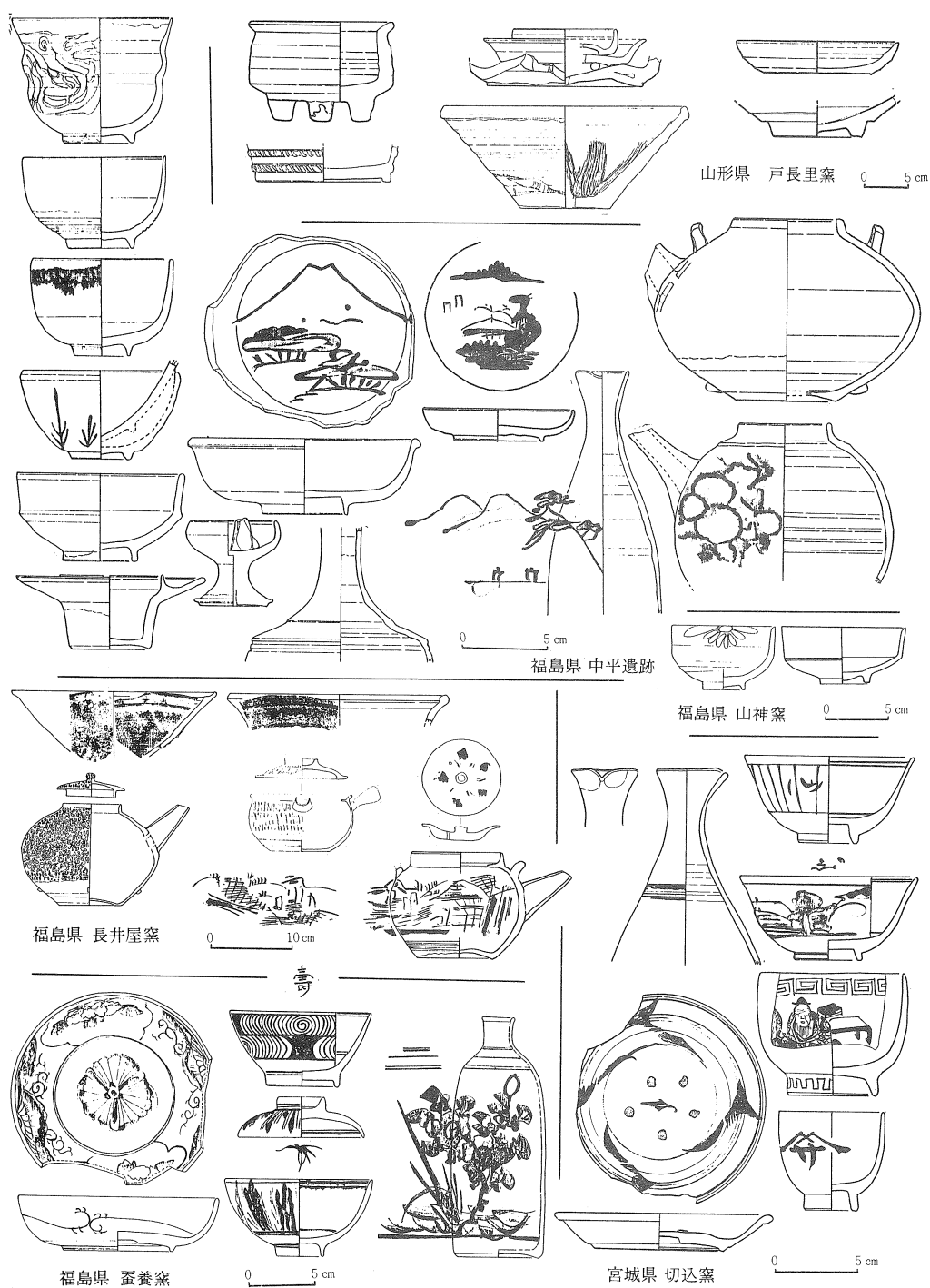


図70 調査された陶磁器窯出土資料

Fig.70 Modern ceramics and porcelains excavated from kilns in the Tohoku district



している。これらは器種ごとに分類され、特徴が示されている（山内 1989）。また、近世墓から18世紀と思われる「彦之丞」銘碗が出土している。これら中平遺跡・長井屋窯・山神窯は、18世紀～19世紀にかけて東北の一代窯業地となった大堀諸窯であり、東北各地や東京から出土する大堀製品を検討するための示標となる陶器窯である。三春町担橋窯跡（三春町教育委員会 1984）は、天明8（1788）年に近藤平吉が起こし、比較的限られた期間の操業としている。出土遺物には大堀製品に類似する施釉陶器があるがその主体は瓦器製品と思われ、同町所在の丈六窯との関係も考えられる。

19世紀にはいる磁器窯の発掘事例は、秋田県寺内窯、宮城県切込窯、山形県上ノ畑窯、福島県蚕養窯跡があり（図69）、東北地方における磁器導入当初、廃窯状況、または明治・大正期の東北における磁器生産状況の様相を知るうえで重要である。切込窯は現在西山・中山・東山の3カ所の窯跡が知られている。西山工房跡（芹沢長介 1975）からは各種陶磁器類と共に茄紺、トルコブルー、白を使った三彩の破片が出土している。また、宮城県岩出山町上ノ目窯産と山形県の上ノ畑窯産の破片が出土しており、平清水窯とあわせてこれらの窯に交流があったことが知られる。またこの時期宮城県内では、宮床窯・三本木窯・白石窯で磁器が生産されており、これらの窯との交流も考慮しなければならない。切込中山下の調査（宮城県教育委員会による1988年の調査）では、3期に分けられ、その変遷が明確になりつつある。今後消費地遺跡の調査によって、前・中期の切込製品の消費状態を解明して行くことも必要である。上ノ畑窯（尾花沢市教育委員会 1981）は、天保4（1833）から製品と白土を生産したが10年余りで終わった窯である。登窯1基、平窯1基、物原が確認されている。物原出土遺物には日常雑器が多く、絵付は染付が中心である。注目すべき点としては、赤・黄・黒・茶の上絵付のある破片が出土していることであるが、量産までにはいかなかったと思われる。また窯道具は有田地方ではなく、平戸系三川内の技術を強く受けているとしている。3次調査では「長崎亀口」銘の破片も出土している。蚕養窯（柳田 1984）は、会津若松市にある会津本郷窯の分窯であり、この調査で蚕養窯の操業期は3期に分けられている。江戸後期（天保期）に相当する時期をⅠ期とし、Ⅱ期は明治期、Ⅲ期は大正期としている。ここからの出土資料には山形県の平清水窯に類似する器形・文様のものも見られ、幕末以後も操業を続けた磁器生産窯の技術交流を考える上で非常に重要である。

#### （4）主要消費地遺跡調査事例

調査事例は数多いが、報告されその様相が捉えられている遺跡は少ない。ここではその中から仙台圏内を中心として主な遺跡の陶磁器の出土状況を取りあげる（図69）。

岩手県の栗田Ⅲ遺跡（岩手県教育委員会 1982）は、大正時代を下限とする屋敷跡であり、陶磁器類の出土数が多い。陶器では遺跡に近い鍛冶町窯産と思われるものが多い。磁器には、19

世紀を中心とした肥前・瀬戸産、また、平清水産・会津本郷産・在地磁器窯産と推定されるものが多くみられ、切込窯出土品に類似した紅皿もある。

仙台北三の丸跡（仙台市教育委員会 1985）は、仙台北藩の陶磁器流通を考える上でひとつの中心となる遺跡である。ここでは、Ⅰ～Ⅴ期に分けたうえで陶磁器の年代的様相を考察しており、特にⅢ期における相馬産碗についてはⅣ類に分類しており、消費地側からみた相馬製品の編年が試みられている。仙台北二の丸跡（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985）では、江戸末から明治初期の出土東北陶磁器について詳しく考察を行っている。柳生遺跡（仙台市教育委員会 1986）は、陶磁器類の出土量が多く、18世紀後半～19世紀にかけての宮城県における消費状態を知る上で重要な遺跡である。東北全般の遺跡に比べると、ここでも17世紀～18世紀中頃までは瀬戸・美濃、肥前陶磁が中心であり、18世紀中期から東北地方産の陶磁器が出土し始め、19世紀後半ではその数が急速に増える。東北産陶器では相馬系が半数以上を占め、ついで多い堤窯と併せてそのほとんどを占める。このほか上ノ目、会津本郷とされるものが若干あるが、産地の明確でないものも多い。磁器では平清水と思われるものが出土しているが、東北産と推定できるが生産窯が同定できないものも多くあり、今後生産地の調査が行われることによってより明らかにされるものと思われる。八沢要害遺跡（宮城県教育委員会 1950）は、堤系播鉢、大堀、上ノ目製品と思われるものが出土している。欠ノ上Ⅰ遺跡（仙台市教育委員会 1985）では幕末から明治にかけての陶磁器において相馬系窯産の陶器が出土量の1/3を占め、ついで堤系、肥前陶磁の順となる。幕末を前後する仙台北圏の陶磁消費状況が示されている。富沢遺跡（仙台市教育委員会 1984）、中田畑中遺跡（仙台市教育委員会 1984）、山口遺跡（仙台市教育委員会 1984）は、肥前のほか平清水・宮床・切込産の可能性のある磁器が出土している。陶器では、相馬製品が圧倒的に多く、上ノ目、堤製品も見られる。今泉城遺跡（仙台市教育委員会 1983）では、18世紀後半～19世紀にかけての東北産陶磁器には、堤・相馬・平清水・会津本郷・切込などがある。新妻家墓地遺跡（仙台市教育委員会 1986）では棺に使用された甕があり、年代的にも限定されることから、堤窯製品を考える上で重要である。

#### (5) 問題点と課題

東北地方の陶磁器をめぐる研究は、今後の進展に待つところが多いが、最後にいくつかの問題や課題を指摘してみたい。

仙台北圏を中心としてみた場合、仙台北藩あるいは近辺の諸窯の中で、仙台北藩に陶磁器を供給したであろう東北の窯は数多くあると思われるが、これらの窯の中で発掘調査された事例は、宮城県内では唯一江戸後期の磁器窯一切込窯が調査されているだけである。東北県内では、福島県を中心に10数例を数えるに過ぎない。調査事例が少ないというだけでなく、調査された窯もその様相が判明しているのはごく一部に限られ、全容が捉えられているわけではない。いずれ

の調査窯もその一端が明らかになっているだけである。こうした状況をみれば、東北地方の陶磁器研究にとってまず第一に必要なことは、考古学的調査による基礎的な生産窯出土資料の充実であることは明らかであろう。

また、これまで調査された生産窯の資料についても、各生産窯の陶磁器の製作技術・器種構成には、窯業開始期と技術的に完成された時期とでは違いが認められるため、各段階の技術の導入がどこを生産地からであり、どのような製作技術的特徴を持つものであるか、あるいは各窯の技術確立期の独自の技術的特徴は如何なるものであるかを把握しておくことも必要であろう。前にも見たように、東北の諸窯は江戸初期においては西日本の先進地からの技術流入、その後の江戸中期・後期においては、諸窯の技術形成・確立、そして近辺への分窯へと発展する。こうした経緯を踏まえて各窯の諸相を捉えておくことが必要である。

一般に、東北地方に流通する陶磁器は、江戸初期～中期にかけては、肥前や瀬戸・美濃など西日本の製品が多いとみられている。東北の地でもこの時期には山形県戸長里窯・福島県長沼窯および岸窯などが陶器の生産を行っているものの、消費地遺跡の当該期と推定される資料のほとんどは、西日本産かもしくは不明とされることが多い。しかし、当該期の資料には、もう一度見直せばその由来を東北の生産地に求めることができる資料も数多くあると思われる。例えば、仙台城二の丸出土陶器（摺鉢）の中には、近年調査によって明らかになった福島県の飯坂岸窯製品に酷似するものが含まれている（本文P.23参照）。こうした事実を考えれば、仙台城に限らず消費地遺跡出土資料には、東北窯の製品と捉えることができる例も多いとみられる。

このような問題は、江戸中期・後期においても同様である。窯業開始期はいずれも西日本の技術導入を基盤に製品が生み出されており、東北と西日本の製品の酷似は当然である。しかし、よく検討すれば出土資料のなかには西日本産と考えるより東北産としたほうが無理のない資料も含まれている。東北内の分窯・技術交流が盛んになる江戸後期ともなれば、技術的にはかなり錯綜した様相を示しますます特定が難しくなるが、ただ、この時期には東北地方でも技術の確立と共に特色ある製品を生み出しており、今後生産窯の調査が進めば、消費地遺跡出土資料の生産地をある程度把握することができるものと思われる。たとえば、近年調査された切込窯では、これまで不明であった初期の製品が明らかとなっており、仙台城二の丸跡出土の肥前産とみていた当期の磁器には、切込製品が含まれる可能性がでてきた。

生産地同定を進めるにあたっては胎土分析が今のところ最も有効な手段であろう。肉眼観察では、前にも述べたように江戸後期の資料ともなれば生産窯が違っても似たような製品を多く生産しているため産地同定にはどうしても限界がある。実際、判別の不可能な例が多い。しかし、胎土分析などの理化学的分析がこれらの問題を解消してくれる場合がある。たとえば、仙台城二の丸出土陶器皿と窯跡採集陶器の胎土分析を行ったところ、肉眼観察では、相馬大堀産

と推測した資料が、胎土分析では、山形平清水（相馬大堀とは技術交流あり）産に近いとのデータが得られ（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985）、再度資料を検討した結果、両窯の製品には胎土・釉調などに微妙な違いのあることが判明している。窯跡の出土資料の充実と共にこうした胎土分析を援用した産地同定を進めていく必要がある。

年代と生産地の問題の解決には、生産窯側の資料の蓄積を待たなければならないのは言うまでもないが、消費地遺跡においても遺跡の地理的条件や遺跡・遺構との関係、共伴遺物との関係からその年代・産地を推測させる場合もあり、消費地側の位置付けが、逆に生産地側へ重要な提起を行うこともある。文献史料も加え、総合的に進めていくことが求められる。

ところで、消費地遺跡から出土する陶磁器類は、城郭もしくは特殊遺跡出土資料を除けば、一般に日用雑器類が大半を占めている。日常的な使用により消耗し廃棄される性質のものである。遺跡からの出土は一括して投棄される例が多く、それは火災によるものや破損したものを投棄するといった類である。そういう意味では、こうした資料は一括性（同時性）が保証されているといえる。ただ、製作年代が異なっていることには留意しなければならないが、それでも通常、時間幅は高級品などに比べ小さいといえるので問題は少ない。このような一括資料群は、生産地窯の動向、当時の商品流通の状況を反映しているものとも考えられる。また、当時の生活の中で必要とされた器がセットをなす例も考えられるので、食器や生活用品の復元あるいはその変遷の把握にとっても非常に有効である。器種構成の分析も重要な意味を持つてくる。こうした点も考慮して、消費地遺跡出土陶磁器を捉えていかなければならないだろう。

## (5) おわりに

陶磁器研究は、窯業史的にも消費地遺跡研究にとっても重要なみならず、陶磁器をめぐる経済・社会機構などその背景にも積極的に発言を加えていくことが可能となるものである。こうした研究は、文献史学などの関連諸分野との連携が不可欠であることは言うまでもないが、今後の陶磁器研究の進展が、近世史の解明にさらに厚みを加えて行くことにもなると思われる。東北地方の研究もまだ始まったばかりであり、問題は数多い。これらの課題を見据えながら、今後、近世遺跡の調査・研究を進めて行かなければならない。

## 《引用・参考文献》

- 愛知県陶磁資料館 1984 『近世城館跡出土の陶磁』（特別展図録）
- 愛知県陶磁資料館 1986 『城下町のやきもの—清州・名古屋の出土品』（企画展図録）
- 会津坂下町教育委員会 1988 『館ノ内遺跡・細田遺跡』
- 会津若松市教育委員会 1986 『若松城三の丸』
- 青森県教育委員会 1974 『永泉寺遺跡』
- 青森県教育委員会 1983 『浜通遺跡』
- 秋田県教育委員会 1981 『蒲沼遺跡』
- 秋田県教育委員会 1987 『鶉沼城跡』
- 秋田県教育委員会・秋田城調査事務所 1989 『久保田城本丸御隅櫓跡』
- 飯村 均 1987 『福島県新地町十二所A遺跡の近世陶磁』
- 板垣英夫 1988 「山形県の近世窯と平清水焼について」『研究資料集』第11号 P.P.13～32（山形郷土史研究協議会）
- いわき市教育文化事業団 1983 『竜門寺遺跡』
- いわき市教育文化事業団 1983 『四朗作遺跡』
- いわき市教育文化事業団 1987 『石坂遺跡』
- 岩手県教育委員会 1982 『栗田Ⅰ・Ⅱ遺跡』
- 岩手県教育委員会 1982 『栗田Ⅲ遺跡』
- 岩手県教育委員会 1982 『下谷地B遺跡』（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ）
- 岩手県教育委員会 1982 『北館・伝大手門遺跡』（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ）
- 岩手県教育委員会 1982 『大沢遺跡』（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ）
- 岩手県教育委員会 1982 『白幡陣者遺跡』（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ）
- 岩手県教育委員会 1984 『江刺家遺跡』
- 岩手県埋蔵文化財センター 1986 『古館Ⅱ遺跡』
- 岩手県埋蔵文化財センター 1988 『毛越寺遺跡』
- 江戸遺跡研究会 1990 『第3回大会資料 江戸の陶磁器』
- 大川 清 1985 『小砂焼』（日本窯業研究所）
- 大竹憲二 1982 『近世山神窯跡の研究』（大熊町史編纂委員会）
- 大竹憲二 1989 『大堀・長井屋窯跡』（浪江町教育委員会）
- 大竹憲治 1989 「大堀相馬焼における茶器・照明具の編年」『いわき地方史研究第26号』
- 大手前女子学園岡城跡調査委員会 1987 『岡城・伊丹郷町』Ⅰ
- 大橋康二 他 1988 『有田町史 古窯編』（有田町史編纂委員会）
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』（ニューサイエンス社）
- 大堀相馬焼協同組合 創業三百年祭実行委員会 1988 『創業三百年記念誌』
- 大類 誠 他 1981 「上ノ畑焼」『陶説345.346.347』（日本陶磁協会）
- 小田原市教育委員会 1989 『愛宕山』

- 鹿角市教育委員会 1982 『花輪館跡』
- 九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』 (ニューサイエンス社)
- ニューサイエンス社編 1988 特集・近世陶磁器 『考古学ジャーナルNo.297』
- 五島美術館編 1984 『「江戸のやきもの」図録』 (五島美術館展覧会図録No.104)
- 坂井正喜 1984 「近世会津の焼もの」『会津の焼もの一万年展図録』 pp.22～79
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1985 『研究紀要』IV
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1986 『研究紀要』V
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1987 『研究紀要』VI
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1988 『研究紀要』VII
- 芹沢長介 1976 「切込焼の碗と皿」『東北考古学の諸問題』 pp.513～531
- 芹沢長介編 1978 『切込』 (東北大学文学部考古学研究会)
- 芹沢長介 他 1981 『日本やきもの集成』1 (平凡社)
- 芹沢長介 1983 「東北地方の近世陶磁」『世界陶磁全集』9 pp.227～259 (小学館)
- 芹沢長介 1987 「東北の近世陶磁」『東北陶磁文化館図録』 (東北陶磁文化館)
- 仙台市教育委員会 1984 『山口遺跡』
- 仙台市教育委員会 1984 『後河原遺跡』
- 仙台市教育委員会 1985 「中田畑中遺跡」『年報』6 pp.16～30
- 仙台市教育委員会 1985 『欠ノ上遺跡』
- 仙台市教育委員会 1986 『仙台城三の丸』
- 仙台市教育委員会 1986 「新妻家墓地遺跡」『年報』7 pp.37～54
- 仙台市教育委員会 1986 『今泉城遺跡』
- 仙台市教育委員会 1986 『柳生』
- 仙台市教育委員会 1987 『南小泉遺跡』
- 仙台市教育委員会 1987 『春日社古墳・鳥居塚古墳』
- 仙台市教育委員会 1988 『富沢遺跡』
- 仙台市歴史民族資料館 1985 『堤町周辺の民俗』
- 高橋良一郎 1977 『相馬のやきもの』(福島中央テレビ)
- 田口昭二 1983 『美濃焼』 (ニューサイエンス社)
- 伊達町教育委員会 1983 『伊達窯跡群細分調査』
- 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988 『紀尾井町遺跡調査報告書』
- 千代田区教育委員会 1986 『平河町遺跡』
- 東京大学理学部遺跡調査会 1989 『理学部7号館地点』
- 東京都新宿区教育委員会 1988 『三栄町遺跡』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』I
- 東北陶磁学会 1988 第16回大会資料『東北のやきもの』
- 東北歴史資料館 1988 『63年度宮城県内発掘調査成果発表会資料』

- 栃木県矢板市 1889 『成田窯業遺跡調査報告書』（国士館大学文学部考古学研究室）
- 永竹 威 他 1980 『日本やきもの集成』11 （平凡社）
- 榑崎彰一 他 1980 『日本やきもの集成』3 （平凡社）
- 人吉市教育委員会 1989 『人吉城跡Ⅳ』
- 福島県文化センター 1989 『中平遺跡』（福島県教育委員会）
- 福島県立博物館 1988 『江戸時代の流通路―米の行く道、塩のくる道』（企画展図録）
- 福島県立博物館 1990 『東北の陶磁史図録』
- 双木利夫 1989 『まぼろしの飯能焼』（奥武蔵出版）
- 平凡社編集部編 1984 『やきもの辞典』（平凡社）
- 埋蔵文化財研究会 1990 「中世末から近世のまち・むらと都市」『第27回集会資料第2分冊』
- 前川 要 1988 「近世城下町発生に関する考古学研究」『ヒストリア』第121号 P P.1～39（大阪歴史学会）
- 前川 要 1989 「日本近世「都市考古学」研究の現状と課題―ヨーロッパ都市考古学研究からみた一視点」『ヒストリア』第122号 P P.62～76（大阪歴史学会）
- 真砂遺跡調査会 1987 『真砂遺跡』
- 益子町史編纂委員会 1989 『窯業編』
- まんぎり会 1986 『戸長里窯跡』
- 港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『郵政省板倉分館構内遺跡』
- 三春町教育委員会 1988 『担橋窯発掘調査報告書』
- 宮城県教育委員会 1980 「八沢要害遺跡」（東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ）P P.351～386
- 盛岡市教育委員会 1984 『志波城跡』
- 盛岡市教育委員会 1986 『盛岡城跡』
- 柳田俊雄 1984 『蛭養窯発掘調査報告書』（会津若松市教育委員会）
- 柳田俊雄 1989 「会津地方の磁器生産について」『群山女子大学紀要』第25集 P P.103～119
- 山形県教育委員会 1986 『下餅山遺跡』
- 米沢市教育委員会 1986 『上浅川遺跡』
- 米沢市教育委員会 1986 『石垣町遺跡』
- 米沢市教育委員会 1987 『米沢城三の丸』
- 米沢市教育委員会 1989 『覚範寺遺跡』
- 雄山閣編 1985 江戸時代を掘る 『季刊考古学』第13号
- 渡辺為吉 1979 『白岩瀬戸山』（翠揚社）